

特集

小学生が島の高齢者の「自分史づくり」に挑戦

今治市社会福祉協議会 関前支部 [愛媛県]
http://www.imabari-shakyo.jp/profile/branchs/sekizen.htm



グループで高齢者宅を訪問し、聴き取った話を1冊にまとめる

過疎高齢化の進む島

愛媛県の北東部に位置する今治市は、今年1月、旧今治市と旧越智郡11町村が合併して新たに出発した。うち旧関前村は中心市街の北、瀬戸内海の三つの島(岡村島、小大下島(こおげじま)、大下島(おおげじま))からなる。関前地区の主要産業はミカン栽培と漁業。近年は過疎高齢化が急速に進み、この8月現在で人口747人、高齢化率は50%を超えている。

小さな島でもあり、高齢者にとって子どもはみな顔見知りで「地域の子」という意識はあるものの、つきあいはなかなか深まらない。子や孫がいない高齢者は学校に縁がなくなり、行事の参加も少なくなる。伝えるべき島の文化も伝わらない。過疎高齢化は地域の世代間のつながりを衰えさせていた。

お年寄りの自分史を一緒につくる

「せっかく同じ村に暮らしているのだから、もっと知り合いになろう」(関前支部長・島崎義弘さん)。合併前の旧関前村社協では、地域で唯一となつた岡村小学校の子どもと高齢者の文通活動をしてきたが、一方通行になりがちで、関わりあいても薄いものだった。もう一歩踏み込み、双方向でつながれる方法として平成13(2001)年から始めたのが、子どもたちによる高齢者の自分史づくりだった。

全校生徒が異年齢で4、5人の班を作り、インタビュー係、写真係など担当を決め、班ごとに高齢者の自宅を訪問する。各回1時間半～2時間ずつ、3～4回ほどの訪問の中で、高齢者のこれまでの歴史や昔の島の暮らしについて聴く。その後1カ月ほどの時間をかけて、カラーコピーも使い1冊の自分史にまとめ上げる。そして話を伺った高齢者を学校に招待して発表会を催し、完成した自分史をプレゼントするのである。

日常の関係づくりと地域史づくり

社協と小学校が全面的に協力し、社協担当者と先生が事前に打ち合わせを重ねながら進める。コーディネーター役の社協は、協力を得られそうな高齢者に依頼し、前もって十分に説明し理解を得ておく。生徒たちはその日どんなことを聴くか自分たちで計画を立てる。

自分史づくりはシンプル・イズ・ベスト

今治市社会福祉協議会 関前支部長 島崎義弘さん

自分史づくりはシンプル・イズ・ベストです。目的が明快でわかりやすく、成果が形となり、親にも理解してもらいやすい。人選などある程度のアウトラインは社協が手がけ、スタートさえうまく進めば、その後はさほど難しくありません。それにお金もかからない。

関前はかつて、石灰石採掘で栄えた時代もありま

聴き取りには先生が付き添うが、まとめる際には子どもたちの感性を尊重し、表現が多少不十分でも、できる限り感じのままを記してもらおう。

この活動のねらいは、まず、災害や病気などの際に頼りあい、助けあう、家族のような関係を普段からつくることにある。過疎高齢化の進む村としては切実な課題である。また、自分史は地域史と重なるため、これを記録として残し、郷土の文化を次代に伝承していく役割をもたせること、地図を作り、地域の来歴について知ることで、島を好きになり、地域に誇りをもってもらうことができればという期待も込められている。

地域間の交流へ

岡村小の毎年恒例の行事となつて本年度で5回目、合計23人の自分史が完成した。最初は話がはずむだろうかと心配もあり、「何を話していいやら」と戸惑いもあった高齢者と子どもたちだったが、数カ月わたる共同作業を経験して、その後も自然と手紙のやり取りが続くなど、心の交流が始まっている。また、岡村小では合併以前から、今治市街の日吉小学校との交流事業として、自分たちの地域を互いに紹介する試みを始めているが、そこでも自分史づくりの経験やノウハウが役立っている。

関前支部では今後、合併した市内の他の地域にも自分史づくりの事業を広げていきたいと考えている。岡村小は現在生徒が16人。児童数の減少という課題を抱えながら、この事業を通して、地域を自分たちの手で守り、育てていく試みが続いている。



自分史づくり事業のハイライト、発表会では、共同作業を終えた喜びも手伝って涙するお年寄りも

異世代交流を通して日常的な人の輪をつくるプログラム

今、各地で異世代の交流をめざした活動が展開されています。少子・高齢化が進行し、家族形態も多様になるなか、地域社会における人間関係は希薄になり、その影響が懸念されています。特に子どもの生育環境を考える上で、さまざまな世代層との交流のなかで子どもの成長や自立を考えていくことが不可欠です。しかし、子どもと大人を同じ場所にただ集めればよいということではありません。そこで、一過性のイベントに終わらせないために、異世代交流のプログラムをつくる視点や工夫、継続的で広がりのある人間関係を地域につくっていく手法について考えます。

学生たちと接しながら共に成長する子どもたち

興望館 地域活動部 五十嵐美奈さん

興望館の活動を担う重要な存在が学生スタッフです。「彼らに参加してもらうためには、それぞれに役割があって、自分が必要とされていると覚えることが大切なのだろう」そう思って、リクルートの狙いも込めて始めたのが青年会でした。

大学生の一番いい点は、大人だけど大人でない



キャンプでは、学生ボランティアが子どもたちと自然体験を共にする

園児・小学生と大人・高齢者をつなぐ学生スタッフ

社会福祉法人 興望館 [東京都]

下町に根づいた小さなコミュニティ

社会福祉法人興望館は大正8(1919)年、地域の福祉課題の解決に向け、地域住民と共に活動を実践するセツルメントとして事業を開始した。北米出身の宣教師たちを中心に、近代日本の産業革命を支えた貧しい都市労働者たちが集住した当時の墨田区本所地区で活動を始め、関東大震災後、この地の復興に尽力しながら、現在の同区京島に移転した。

現在は保育所や児童厚生施設、児童養護施設(軽井沢・沓掛学荘)などをあわせ持つ、児童福祉を中心に据えた複合施設として運営されている。

「お食事友の会」

地域での活動としての取り組みでは、小学1～6年生を対象にした学童クラブ、年長児から学童、中高生まで年齢別のキャンププログラム(野球・スキーキャンプもあり)、近隣の高齢者の集いの場をつくる年輩者プログラムがメインとなっている。その他、プレイデー(運動会)などの各種イベントや、ピアノや書道といった日常的な教室活動など、多彩な活動・行事を通して、地域の幅広い世代が自由に出会う小さなコミュニティづくりをめざしている。

週1回の昼食会、「お食事友の会」は、地域の高齢者と保育園児のふれあい交流を目的とした催しである。興望館のスタッフと地域ボランティアの協力のもと、



園児たちがお年寄りのために歌を披露し、一緒に食事をす

平成2(1990)年から現在まで続いており、地域に根づいたプログラムとなっている。この地に長く住み、知り合いも多い高齢者が集まることは、地域の中での信頼性を高めることにもつながる。

学生スタッフとキャンプ活動

この昼食会で、高齢者と幼児の交流の助け手として大きな役目を果たしているのが、大学生のボランティアである。興望館では以前から数多くの学生ボランティアが活動してきた。彼らのネットワークのために、平成13(2001)年に青年会を立ち上げたが、その活動の一つが、月1回開かれるシニアリーダー会議である。各種キャンプ活動に参加する学生ボランティア(キャンプリーター)の研修として、キャンプや保育(生活)の技術向上をめざすと同時に、日常の活動全般における学生ボランティア養成という側面もある。キャンプというイベントには充実感・達成感があり、学生にとってはボランティア活動の入口としてわかりやすい。そこで興望館の事業に触れてもらってから、その後は個々の適性や興味関心に応じて、食事会や学童クラブ、障害児サポートなど、日常の活動に参加してもらうのである。

地域に支えられ、これからも

興望館の歴史は長い。乳幼児期にここに関わった人が、その後は学生ボランティアとして関わったり、利用者として自分の子どもを預けたり、歳をとってからここで仲間との集いを楽しみにしている住民もいる。この地にしっかりと浸透した活動であるがゆえに、それぞれの世代が自然に場を同じくし、互いに学びあい、助けあう空間ができていく。

興望館のある地域では現在、大規模な都市再開発事業が進行している。防災上の観点からも避けられないすう勢である一方、興望館にとっては、これまで世代を超えて活動を支えてきてくれた住民がいなくなることを意味する。これは「館にとって最大の損失」(野原健治館長)であるが、積み上げてきた信頼という財産を土台にして、地域に根ざした活動を実践していくという理念は今後も変わらない。

子どもたちにとってこれ以上魅力的な存在はないんですね。小学校高学年になると、だんだん大人の職員では物足りなくなり、ここにも来なくなりがちです。でも、学生相手なら、しきりに質問したり、彼らを外の広い世界への窓にしているという感じで、その姿に憧れるというもあるようです。

学生が子どもと大人を媒介してくれる一方で、昼食会は、この地で激動の歴史を生き抜いてきた、経験も話題も豊富な高齢者が学生を教育する場になっています。学生も居心地がいいらしく、「癒し系プログラムだ」と言います。ただ、初めての時などは職員が話題をつなぐような役割を心がけています。面白いのは、学童クラブの後つながりが切れてい

た学生が「実はずっと、学童の頃の恩返しをしたいと思っていたんです」と、キャンプリーターとして参加してくれたりすることです。学生はお金はないけど時間があふ、熱い思いをもって、手応えのある何かを求めている。そのことを痛感します。

子どもをみんなで守っていくという一つの目的を通して、学生たちも実感をもって興望館の人間観を受け止めることができる現場実習の場であり、また人生の先輩たちに学ぶ場でもある、恵まれた環境にあると思います。「ここは成長を実感できる場所だ」と言う学生もいます。次のチャレンジと一緒につくっていくような、スタッフのサポートも含めたくみづくりもだんだんできてきているのかなと感じます。

日本青年奉仕協会(以下、JYVA)では、子どもからお年寄りまでさまざまな世代が共に地域づくりに取り組む活動の啓発・普及を目的として、「異世代協働促進事業」を実施しています。事業を担当しているJYVAの松尾索さんに、効果的な世代間交流を実現するためのポイントについて伺いました。

交流のその先に
深みと厚みのある
日常的な関係を



もとむ
松尾 索さん

社団法人
日本青年奉仕協会
事業本部長

「異世代」で「協働」する

JYVAでは、子育て世代の家族を対象としたファミリーボランティア推進事業を進める中で、単に血縁の家族だけでなく、地域での異なる世代間の関係を意識したプログラム開発の必要を感じ、「異世代協働」の事業を始めた。すでに全国各地で、子どもとお年寄りの交流活動を中心に「世代間交流」の取り組みが進んでいる。ここからさらに、若者や子育て世代など異なる世代間の多様な交わりを広げていくこと、また交流だけに終わらせず、それを基盤にして共に地域をつくっていく関係を築こうという願いを、この「異世代協働」という呼称に込めている。

背景と政策決定への影響

近代化による旧来の共同体の崩壊、人間関係の希薄化は近年さらに進み、社会的な孤立の危機は誰にでも起こりうる状況である。人間が豊かな出会いと体験によって成長し、他者や社会との関わりを通して自らを確立していく存在であるならば、異なる世代との交流・協働はあらゆる世代にとって意義があるはずである。

また、少子高齢化の進行から考えれば、世代間の相互理解には政策的観点からの要請もある。年金や高齢者福祉サービスについて若年層がどう感じるか、増加する高齢者層が子どもの教育についてどう感じるか、それぞれの意識が政策決定に少なからぬ影響を与えることが、今後さらに予測されるからである。

交流度レベルを意識する

異世代が交流する効果として、子どもたちを見守る輪が広がること、貴重な文化の伝承などが挙げられる。また、大人や仲間たちに助けられ、見守られる経験は、子どもの自尊感情を育み、潜在的な能力の向上に資するものとなる。高齢者と接した子どもは老いることや福祉についての理解を深め、大人世代は地域での自らの存在価値を再認識し、高齢者には認知症の予防や脳機能の改善も期待される。

世代間交流活動を自ら展開する場合に、交流度レベルを意識することが有効である(図を参照※)。これは活動の良し悪しを計るものではなく、その活動の目的と成果をどこに求め、さらに発展させていくためには次に何が必要か、を検討する際の一つの指針として考えてほしい。

プログラムのしかけ方

効果的な交流を実現するには、何かをつくり上げるなど共通の目的を設定し、達成に向けてさまざまな世代が一緒に行動するというプログラムが大事だろう。参加者を広げ、継続していくには、プログラムの内容が面白く興味を持てるものであることが当然必要である。

例として、地域の高齢者がアシスタントティーチャーとして学校の授業に参加する取り組みでは、子どもの学力向上という目に見える効果と、効果が見えることで高齢者もやりがいを感じたり、地域の子どもたちについて知る機会となることが期待できる。「子どものため」の活動であっても、同時にそれが大人や若者が地域に目を向けるきっかけとなるようなしかけ方ができれば、多世代が関わる意義が高まる。

地域の人たちに参加を呼びかける時、それに応じない層にどうアプローチするかは大きな課題だと思う。教育委員会や小中学校の全面的な協力を得るなどの方法で、すべての子どもとその親に情報と機会が提供されるような工夫も必要だと思う。

交流の先にある日常へ

地域の課題を地域の力で解決していくという取り組みは、世代間交流と一体で捉えるべきである。課題解決に高齢者の力、子どもの力を借りるといった重層的な展開がもつと求められる。多様性を認め、互いを活かしあうという意味で、どんな取り組みにも世代間交流・異世代協働の要素が見出せるはずである。日本では世代間交流の研究は緒についたばかり。今後は効果を検証するしくみなどが必要となろう。

世代間交流は成果が出るのに時間がかかる。積み重ね、日常に根ざすことで初めて意義が見出せる。効果的にしかけるためには、丁寧に多くの人をつないでいくコーディネーターの役割が重要であり、その育成も今後の課題と考える。

交流度レベル



1. 異世代のこについて学ぶ
2. 異世代グループと間接的に交流する
3. お互いに会う
4. 一年に一度、もしくは定期的な交流活動
5. 試験的なプロジェクト
6. 継続的な世代間交流活動
7. 継続的かつ自然な世代間交流・世代間支援とコミュニケーション

(Kaplan, M. 「Intergenerational Programs in Schools: Considerations of Form and Function, 2002」より)